タネの進化

農業や園芸に携わる人はともかく、普段の生活でタネのことを考えることはほとんどない。コメはタネそのものであり、パンや麺類の原料も小麦のタネだ。野菜や果物はもちろん、肉や乳製品であっても、それらを提供してくれる家畜たちのエサはタネに由来する。魚介類だけ食べて生きていくこともできるがかもしれないが、内陸に住む人々にとっては現実的ではない。私たちが普段食べているもので、タネに由来しないものはない。タネのおかげで生きていると言ってもいいくらいだ。

虫たちは花粉を運んで、植物の受粉に協力し、鳥や動物たちは食べた実やタネを糞として遠くに運ぶ役割も果たしている。人間はどうだろう ？ 植物たちにとっては、子孫を残すために満身の力を込めてつくったタネをただ横取りしている放漫な生き物に見えるかもしれない。

人がよりよい作物を得るために品種改良をして来た。昔は、タネは交換するもので売る（買う）ものではなかった。“タネをとり、また翌年に蒔く“という当たり前のことが、巨大なビジネスに変え、生産や流通側、つまり売る側の利益のために近代は進化してしまった。

F1（エフワン）品種という、人為的に交配された雑種世代の一代目交配技術。異なる形質をもった品種同士を交配すると、その両方の良さをもった途方もなく強い品種ができる『雑種強勢』、一代雑種、交配種、ハイブリッド種とも呼ばれています。そして、いま押し寄せているのが遺伝子組み換え作物です。たとえば、青い色素をもっていないバラにパンジーの青い色素をつくりだす酵素のもとになる遺伝子を入れると青いバラができます。除草剤を撒いても枯れない草の酵素のもとになる遺伝子を作物の遺伝子に入れるとその除草剤で枯れない作物ができます。遺伝子組み換えは、植物同士だけでなく、植物と微生物との間でも行われるようになってきています。

タネは記憶する

自然界では、タネは、どうしたら自分たちが子孫を残していけるかを遥か昔から考えている。何世代にもわたるなかで、その土を知り尽くしていきます、

タネは育った土を記憶するんです。丹波でとれた黒豆を北海道でまいたらうまく育たず、逆に北海道の黒豆を丹波でまいてもやはりうまく育たなかったと言う話を聞きました。同じ品種の黒豆でもそれぞれ育った地域（土）になじんだ固有のものになっていくんです。タネは育った土を覚え、育てた人の個性を身につけていきます。その土地、土地にあった“固定種“を大事に育て引き継いでいくことが大事です。そして、その土地でしか食べられない美味しいものを残していきたい。

木村 秋則 氏（奇跡のりんご 無農薬・無肥料栽培者）

自然栽培 Vol 4 秋号より

私も今年から、自家採種します。この地の米を作り続けます。